書画

九

平と詞を名ら書

[V. 12]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 12
copy 1
Asian
Japan
Lage

2004551302

源氏廿六の三月より廿八の年まで

世中いとわづらはしくはしたなきことのみま
されば、せめてしらずがほにありへても、是よりまさ
ることもやとおぼしなりぬ。須まは昔こそ
人のすみかなどもありけれ、いまはいと里ばなれ心
すごくて、あまの家だに稀になどきこゆれど、人
しげくひたゝけたらんすまゐもいとほいなかるべ
し。さりとて都をとほざからんも、ふる里おぼつかなか
るべきを、人わろくぞ思しみだるゝ。よろづの
こと、こしかたゆく末おもひつゞけ給ふに、かなし
きこといとさまざまなり。うき物とおもひすて
つる世も、いまはとすみはなれなんことをおぼすには

いと[後]ごろさこと[なほ]うち申しも[娘]ぶのあ[音]
れるそへてもどひたびさめくる[後]の心ぐ
さたるもどもとそれて[後]ろをゆかりて
もまろあひうんことをうるぶとなほうんそぐる
れ二日の程ようくるあくしうすりくぶる
なほつるさ和るなほ[必]ぶも心ぼそうのこなほ
めくるといくとせそれ程と[限]ぶうちもあく
ぶをうぐりうべぐりゆんまぐめるさ世る
やぐてワるべぐぐでまやといぐうなほし
めへぶのびてまろもまやとなほしうなり
れどうる心ぼそうん[海]げうのうるれうれる

ゝうまでゐ人へとゝうしんにようくらゝくゝうきれさ海
まそびゝさゞ〜のへくんもいとつゝるくゝけが心まを
中く地さひのつまゝうべゝ代なゞ・おばしゝ人を
を・ゑ紫ゐいゝゞうゝん道ゝをゝれゝゝてずゞる
あゝゞゝまむゝてゝゝめゝげまおばいゝりゝれ
芝ゝる星まおいゝゝふゝとゝゝまれゝれゝて
ゝばゝく衰ゝれ有ゝとゝれゝげまゝれてもの
しまへゞいゝゞうゝすゞゝゝあばしゝゝる海いゝく
ゝゝりゝゝる代ゞりまゝてもゐのゝまゝゝてもゝりゝ
ゝゝひまひしゝ家ゞ人ゝれ心をゝゞゝさのゝ人そ
おゐゝりけゝへ道のまゝゝうも地の実やまゝいゝゞ

とりみすてられんと我れにあはしましくれど悲び
つくれとてひつれはありむかしやうはあひ
おぼしおぼされをまろせ給ハまじけれバとうちあひ出
給はさらぬさはぐは心をのみつくしさべかりける人の
疎かれとうつゝにひきかへしありさまもさりかあ
ありみれほどにまうるんぢやこゝろもれ給けれバ人はいはま
ともしもきてせずうずぶいとちうつりかうまつり
なれしうゝぶかりせ八人ぶかりけれどもはすてひとりけ
りまて出うち給さうんべきさ家ぐはれ文針ワざとあう
ずうち志のびのありしはも哀と志のびうつ針りきさつ
くすへるハぞどうろもまきぬべかりしかどそのありの

世ちのものぐれまでゝぐくもとゝてとりゞぐ姫は
なり二三日ありて（源）おほ（太大臣）いとのに参りたまへれは
まとし御へりおぼしろ車のうちやつれさせ給ふ女の
やうまてりくろへいりあまふとおそれは夏と
のこおぼゆれば（源）いとさびしげにおあれうつくちち
して（夕霧）うゐ君のはめれどもむかしきひし
人の中にまでちゝめかざりくけりおはへるを
めでしり男てまうのがりつどひてぞそてま
つるまつけてまどとまあれわくらめけき人ぐ
さん世のつねちきをひきつれて洞まくれてりせう（夕）
君はいとうけくしうてざれをりとおもしろりびさ（源詞）

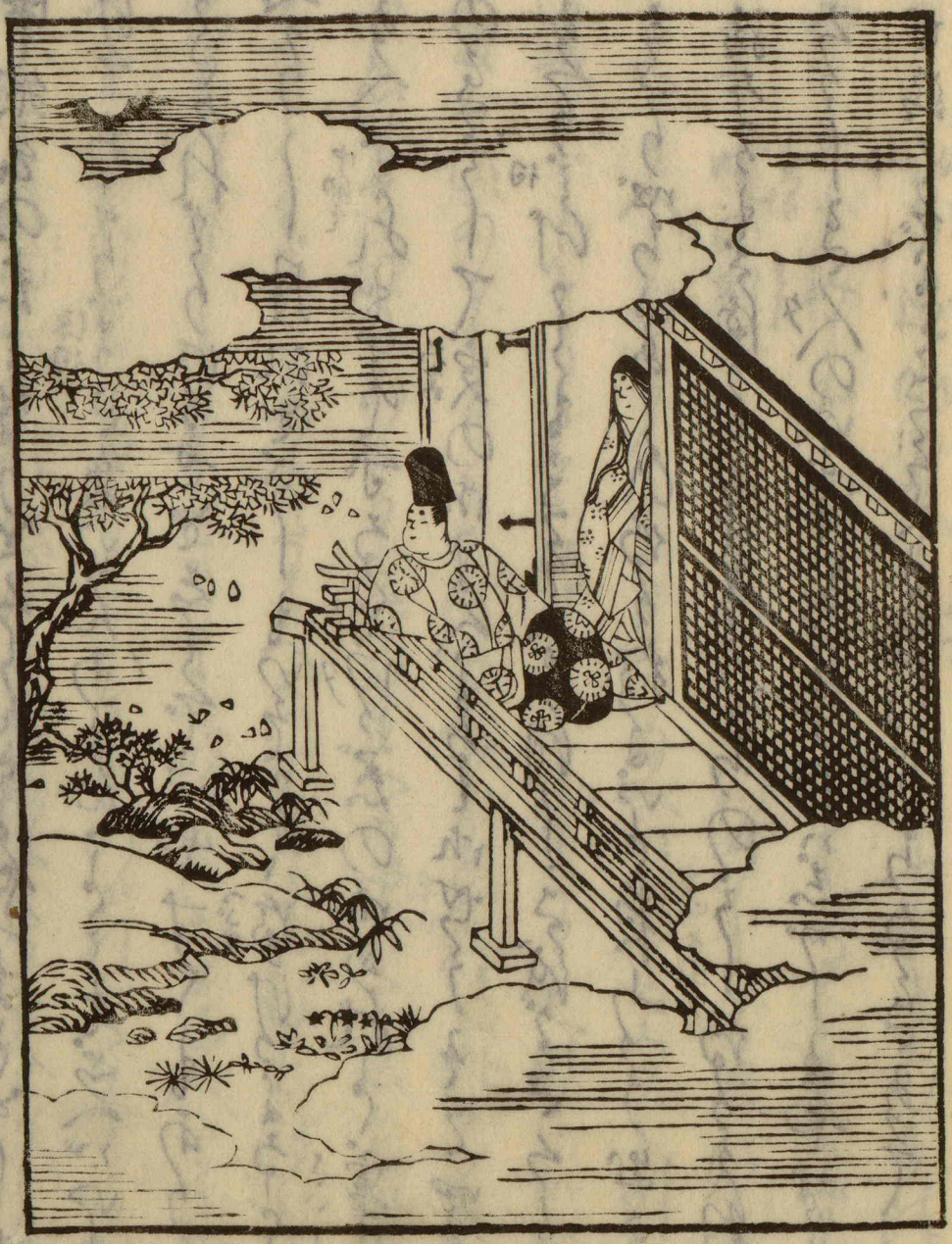
ちゝ程なくこれめゝて衰へられてひざるすへ給
へるれゝこゝを思ひ出げるりおとゝ（左右）ごゝるるまいりり
めてよいめゝのりづれ（左右カ）ぐゝりこゝもせめへゝん
ほどなくよゝ作ゝめ世話もまいりゝてゝゝゝ
ゝきんゝゝめれど男のやまひまゝゝゝゝ
やけもつゝまつゝぶゝるをもへゝゝてま
りて作ゝまゝるゝゝざ海ゝ月ゝゝのべてなど
ゝゝゝゝゝゝひゝくゝゝゝゝべゝゝ今い世中
はゝゝゝべゝ男ゝも作ゝれどゝゝゝゝゝゝ世のゝ
おゝゝゝゝ作ゝりゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝけて命ゝるゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世の業はまた作りかれおめれてしかさうさ海ろ
ケ丁てもそ給ようしざりしれありさ海をさうまふ
ればうろびいとあげさるくるんと笑んめていこう
さ海られ給とあるこもうろこもさうさこの世の
ひとひまこて作なればいひまてゆけぐこぐこげ
りこのまこうりるん作ろさしてうく皮膚をと
られぐおさうるうこるようづひてぐるあ海
やけのうこまりるる人のうひしぐ海ようて世中
まありあろいぐをまさひぐる人の国ようもし作
ケろとどくさるうつさすべさうぐめケぐも
作ろケるいさ海とるつをるあうべさうようて

侍らねばさびしきにまかせてつれなくすぐし
侍らんも、いとゞくるしく、これよりおほくなるを
さらに、のぞみなきまゝに世をのがれなんとおもふ
あへてうらめなどし、夜やうやうさりて緒むすびしのれ
挹沢院のゆゑにおぼしの緒をむせしれ心ざへなど、
思ひ出てはなつかしの袖もしほるゝちからぬる。
涼もえ心づくしもまてなしなかぎ。夕の君のなすは
ごうわなくてなどざれありことそゞられなられはさて
かたはらいたしとおぼしける色侍りし人をも世におもふ
とまへはすくなき世なくのこと。今はなかりしのちさへ候。
これはいとゞしくなるんとまつし侍る世なくしつまりければ。いか

やうるこびをげさ仕るまつりごとくてこそ
くる事をとぶ必ずけるとおもふまつりへなぐさめ
仕るおさるく地しの民うくるこひを思ふ中ま
ぐまりまてなびさひこさてあ月日やへぐり仕
るんとぐこひのるる民るんこるげのこるとまれ
しう仕るいるしへの人も民こるおるしまて
しもるるこるとあるこるぐりるり仕さるべこるて
人のみぐるまるるたぐひ月日く仕るるされぐ
るひ野るしあるてこそるるこるも仕るれどこ民
るうぐ民るこひ仕るるんるるくるんなぐ月日く
のれ地仕るるるこ仕中れるまるりあひまて月日

ゑさなどまゐりあつまれば、東ゐけめれば、保
人どれ前よりうつくしきせをして、指貫ゐどきたる人
ゐりはべるとゐるうちに、中納言の君、八の
ゐるゐるしうちゐるさまを、保人べきれど、義とおぼえ
人これたびまゐりあつまりつきてゐるこひ給ふ池
ゐりまゐりあつまるべし、明めれば東ゐうち出
給ふ。月の明いとおもしろう、空のすがたもやうく
さりゆきて、ひびゐるまゐのいとおもしろき。雁
うすく雪ゐりしそこ、ゐりしゐるくすこあひて、
秋の東のあれよりはくもちまされりすこのま
のうちうんよりしゐるとてとどりゐるめ給



中納言の君、なりをとりなんとやつまどをしあ
けてみるに、（源氏）まるきあいめんわるんことをそさへばいと
ろくそれどうけうせとそこで心やすくもありぬ
べうし月ごとをこもりてをがて後ぞけうよるぐの
ゆへばかりも男ぶるく（ウタ）ぐのれめれと、宰相（さいしょう）
のきみして、（きみ）文のれまへるもれせうそこ男し
めうこげうこもこそしまはしこそばくさうす
こぐうぢちあしひ作るいと東ようう出させ
給なるもこ後ようろうこちのう作ようれ心
ぐうしきんへのいぐこるこを行いまぐもやすこ
せ給そでとこそしめれば（源）ちるこめて

（涼とう）鳥遊び山もえて（焼）もまがりやとあまれ遥
やくうつみてゆくれくしともるくうちず
ものて（暁）の別ハうのうやい心げうてうるさひ
ものくるくもあらんうとのものへいつとるく別と
いもどうてうて作うるる年まもげさい秋
ぬぐひあるまでうさひものくるく狩うれとうる
ぐるうてげるあううぶなまくり（涼）笑うきまはし
うてもぬくさふうまくるぐうぐむもぶくれ
作る狩をううせうまくいぐうるさくなうは
へんまつけてもゆくううる世のぐれぐうさひ
ものくれめぐれいぐ心づくうふうまくるて

いとさまうで作とこさとて給出のふ程と人ごゝ
ぞこさてこゝとてまいるべくこの月いとあるこゝるいと
どな後めしうこゝろうこゝろうて地をゆびひこゝる後ど
らゆゑうこゝぞるまるこゝあべしまていこゝけなく
ゆしきし程ゆうこゝろうてまうこゝろあてしへこゝるれば
こゝしへこゝるこゝれあうこゝ後をいこゝでとこゝふまこゝとや
れれうへし

大文字

こゝるこゝしへのこゝろれやいこゝでへこゝこゝん燈こゝるり
し雲おこゝるこゝでいこゝこゝこゝこゝて衣のこゝうこゝこゝ源出
給ぬこゝるおゆゑしこゝこゝまでこゝるこゝあこゝうこゝとのこゝかり
こゝれべゆゑれこゝるこゝのこゝへこゝこゝまこゝこゝこゝまこゝこゝうこゝまこゝこゝけこゝこゝ色

まて所ぐるまむれあておさまりしとのこせをさくる
そうさるるうさまりしひるはそうしうくうまつる
うぐるりはれともるまつるべるこ心まうけりしてけるる
りの別ありむほどやへへもるりさあへへい
るりひまつるもるるさどあるるとびづりりさ
るるまされば所るくはどひり馬車のるるまるく
るびりるる世ほんいうるる和るりるりるりるりるりるる
ぶいるんるどまるるへるるりどるるるるるるみ所ぐ
ひるるへりるるるるるどぐるるるるまるているる
あれゆんるるるるる和のるるりるりるるれど
るかるりるまるるるるるるるるるるるるるるるるこ

なごりつきつくべかりしまでおもひ
さくられおすぐしどもおりうて出いるをさう給
まもしぼそう年月へぐうろ人ぐまえうしまま
そぐやゆきちくむなぐさうもあるまぐさとき
へれめれミまるとろうぐよべいきろくうして東ゆけ
ううばるん例のやうぐるうさ海まやばうるう
けるうくて仏ぐぐるれめぐれずくおまふをうく
世をそろるくさたるはそろぐうさとのをの
ぐうなるうけるばひやぐまりまてやいうれ
るうさ世よ人まなうけるうさ和と心をれうてんも
いとなりうてるんと学てまへぐ世をまく

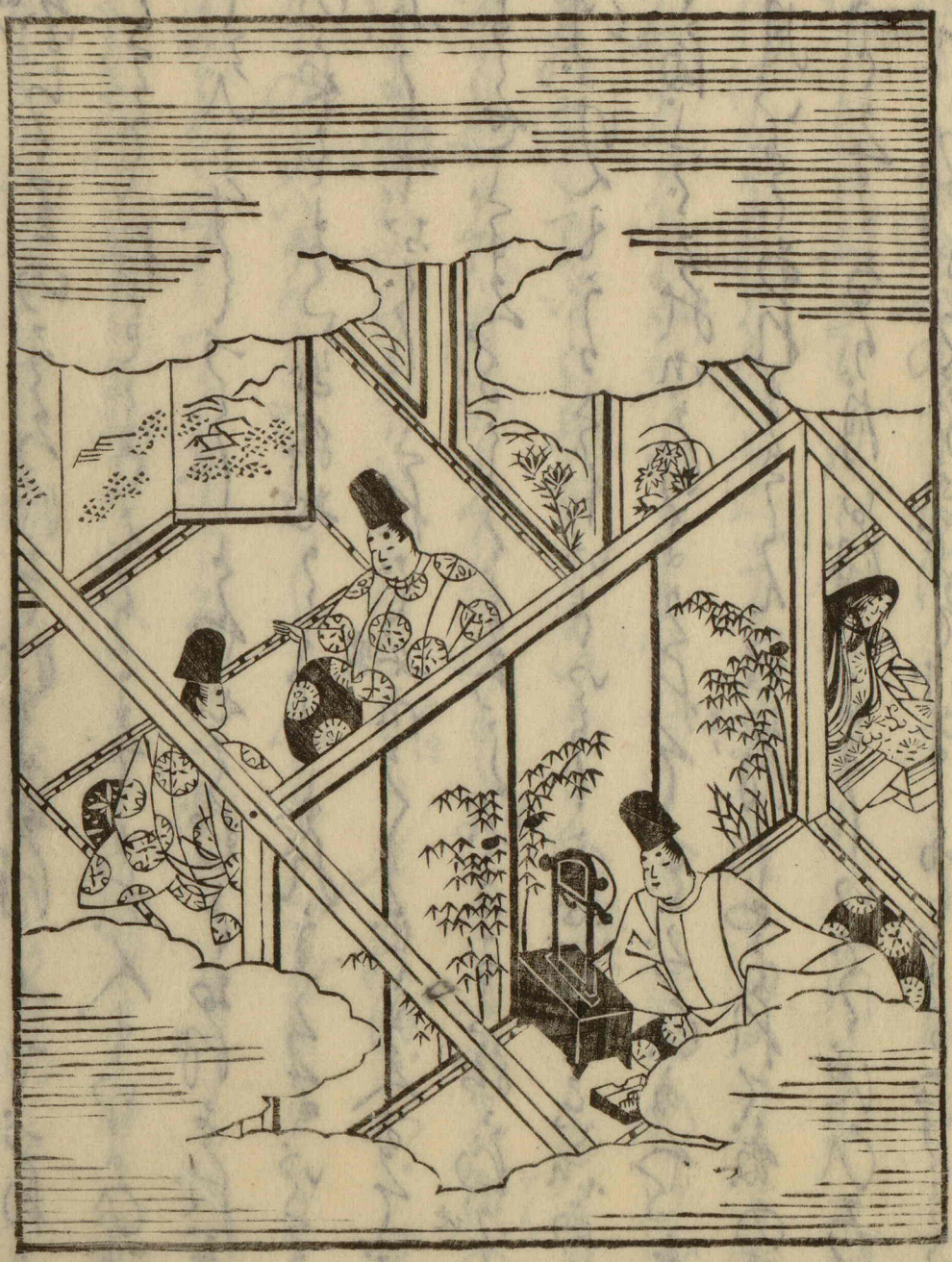
うらみはてぬるうらこそはうるはしきものとおもひ
なしていとゞしへうらぬ人うらとなるをも
ものうらぬぞうらなくうらはいとゞうらうらてまく
うらあばしつるうらけうるまうて世の人をつゞく
うらぬりてをとづれうらぬうらぬるうらぬるうらひう
ぶるつうらぬうらあれ人のうらうらんうらもうづう
く中うらうれうらうらでやうるうらをまく世
のかのうらうらどのせるにうらるうらうらいのあは
うらうらあるかゆうらやうらうらうらうらうつけて
つれぬ人うれうらのうらひけうれうらうらうらあうて
ものうらうらぬるうらうらううけぬうれうらう

絶てとゞこれとゝゝ結ぶ文ゝ
げゝぞあゝれるゝれゝゝ海ゝ
ゝゝて年月をへゝ岩間の中ゝ
ゝゝんゝ今ゝひゝゝゝのゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゝゝ月日ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れう帥家三位中将なりおりてうふいめ（保）
くんとてれうをてたまづくてまつる位（くらい）
とてむまんのれうをて中くいとたいうて
ふたてうちやつれのつるいとめでうれびん
うさのあとてさやうづるうちまつるおも
やをのへるうげのうれるづいとあてまたまつ
たれば（保元）よるうくてをとろへよろれびげのやう
うや風をて作る義るつづうれとのつまへば（業）
間（あいだ）とあう者てをとろせのつるいと悪（しのび）づて
分（保）いうくてをすくへめとも悪（しのび）あうちうさあ
うづれびをとるれど・とをとろしのへど

蛍

つれてもげにつるるるる物なるべき様をしても
をぐあてまし いみともなるてうらぐれて
おうれてゐるるをまぐらつめる庵にこそ
ゐるるるるぐひるるるるるるるあ[illegible]しゐるる
人のれあるる庵るるみるは蛍あれるる物ぐるる
をるるしあて ゐるる用ぐるるるるる



（添山）
茂らる星のころはぞげるなばしてうれる
ふるるし給もとそうるてゐ人もいまひと
しびこずしうしとわ心むとなばもばそ
の秋もまろ出給ぬるいとまれうるていろう
ゐておろしれぐ（繁）ゑれくうどまへのて立
うるせまへるくどろうしびるて給海（池）うさ
けげへもうるさいといとうこうしばそされあり
海ごてれけげるうれてどぐひゐる年
月いとぐあれまるん行なば（添）しやれて後の四
ひとうするう有なばるるういでく池ひろく
山うづるさいろふばそげるゆるもするか

れたる嵐山のうちなびくやうにゆきてよ
ひうしもつうち沼とぶやとうちうちしてあ
しけるあくれそへうち月げのかたぬうて
ゆうちうちうちうちうちうちうちうちうち
れうていとあやうちうちへばすうておぞう
ひでやどそ月をうてなけとそこくるれれ
行る明ぐちうちぬまうちうちうれぬやうば
うのふんもへうてまやとうてとうて
うてそどつう辛どうもうやうちうちうり
うれうしまうめべうまてうまうくこの
とまうせうくうてうれとうてうこのうども

のあて。鳥もとばくなげがるつゝいそぎ
出給れいの月のへくゐる行ゝとくられて哀なり。
女房のゝゝされぞるうつりてげるめゝくゞはなれば
月（紀）げのやどれる袖いせゞくゝとゝとゝめても
ゝゝやあるあひゝといゝゞとゝゞいゝゞゝゝ
ゝゝゝれゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の人びとのこゝろをとゝのへべきなんしも
さゞめきもせぬほどもよろづひまゆるぶりに
まろうちいでさるまつり。れ山里のれすみうは。ゝは
えさうぶとりつゝひめべきあどもこゝろさうよゝひ
まろくこゝろそゞろて。まろさうべきつこども文集(ぞんぢふ)ぐ
のれうこゝろさてし琴(きん)ひとりでもせぬ。あきさ
れでうど。花やるるれうてひたすらさうるべ。ぬ
ぞおやゝのゝ山びめてもてるぬさふふ
人びとりこゝろびめ。ろびのこゝろれ(ぬ)まゝのくいり
こゝろてしつゝもあやうやうびぬこゝやう。みまのこゝ
ろりこゝびめて。こゝうべこゝあびの夢(ゆめ)たまびこれこて

まつりごとを給はれとおのをのをもをもおさめ
どのなどいふこまでか細云をぞうぐしをも和
ゐをとさうまへれいをつをさ家司(けいし)どもをつて
をつをめすべきを殿どものまひあげくつがれる
の中務(つかさ)中将などやうのへぐうれうをされまて
るをうぐををてまいる程ををぐさあつれなる
ぐをつけてをくをへどもいのちありてこれ世まま
へるやうもあんを給つけんと思をんへををか
をまうをへとのまひてをうをもをれまうのぼら
をまてをうべを和どをもをれぐくををせまおつ
ぐのれめれとをちをれちる星なぐるもをうをさ

ことばのいとうまれてまめくるさすらしばし
らめくるる（勝）侍のこのれまくるつりたく（保）
そてこそ結ぶ（久冊）そせ結らめもとろるひのへ
るぐら今くらせばとふのへくべる程のうさもつら
さもうぐひるこそくるてこそ伝れ
あふさるさるぐの河るこぐこやるぐる（保）
れのこぐめ必けんくこのへいづくのこたんうこ乃
れぐこう伝けく道の用ぐもあやうれ、ぐこ海
るいこそこし結こず必（勝）いくいこぐうばしのて
志のびのへど出袖こうあまるも不もくるん
ばる（勝）河うふるこるも消めべくこぐれて

後の世をもまもらずて、ものくるぐれうきめをみる
ていとはりしげるりうまひとこびさいめうくてゆ
とはばをいたくたちはしれどおぼしくへして
うしとおぼしるまゆりあはくてぐろけるう
ずあをへいとあるどちるもアし給ひぬるあおさ
とその書まへ院のれもろおぐこしてもう給とて
ろろ山へまうで給曉あろきけて月出られるれいまぐ
入道のうやまうで給ひうきうまのまへまおま
まりてれ光づくうしてもを給ぎ愛のれこしれ
いうどくうもろめうもれまとひアし給ぢこうり
心ろきどちのれ祇供ろうぐの長海さりけ

うしなふうめでたきされけるひのむうしう
うしうめよつうしうれんどんもうみすめうしうさ
せ海はしれどいまうしうようしてとあばうべく
つがれうしうまと中くいまひとうしはうべれま
うりめべれいどひんでうへして（原汙）うべくまひけ
めつうまあうりくべうもおまむうまへあはすか
うとの一うしまなん変ありてうしう作うあしけ
るうしう変いうしうるるうしても変のれ世うべうこうか
くおうしまうしうでとのうこ学へ結べうとうるや変（故人）
もうれあばしまうしうしうしうあれべれいのうう
べうして学しやうと結うぶ大（原）るうづのうとうさあう

めぐりてのちまたに結へるそこなりとつきぬ
なげめかなりれ原汨山まいり侍れしと川て
やとりて結ぶ抜みる地もとに結ぶ侍りて
あしひ結れそこなり
抜
引いたるあらうるしを世のうてをそむ
そこひまるくてあらいうるしを心まどひ
どもあ侍りあつむることもえぞつけを
こまるめ
原院
別
しるうるしをいつこのうるしをもこそ
世のうたまれる原まちいでいでうるふれ
ゝもるこでめ人でうしもべもむつまし

うぞうとしてれば馬ばかりでおもしろくもなく
なれどもこれ世のれいありとうるとくなりこれいと
うるしうふ中るうれうとうぞの日ぐりのこずい
ぶんまてづうまいりし。おもものぞうの義人
うべきうりもれすぐづうれうあるこうぶけ
づれてづうさもこれてつしるれば馬とも
まうちうりうものこあれこやしろ紙うれと
こつ手ぬぐふとなまひ出されてありてあはん馬
のうちをとう

義人
ひきつれて葵（あおい）うぞうしくこれうこをこんぢけら
しうものこぐぞこうふをげる（ほん）いうぐなまうこん人

りけるやうにしまれをとなびかせて
いづくにか（原）ものもれ馬にうちのりて出やうにのる
とおぼえて侍りて　神よまうり上のふ
（原）
うちなびかせとぞいまはつくとぞまうしあをば
いづすれ神よまうをてとのゝふさ海（義人）拍めですう
つくしへうて光うしうて衣ゝめでうとこうて
まうろ出（原心）山よまうでのておつまくれありさ海
しでめれまへのやうなばし出うぐうりうまうて
も世ゝるくぬめうへでいたんうるうるうちあしう
つぐうりけうろげのことをうるくにのてもう
ゝうりをあくはこえうけうまうりめうるでさぐ

うちなびくのこゝろをしるべきこゝろぐのけゆいごんを
いづちへうせにけんといふひるはれくれは
道のをしへをたづねてかいりの路をいそぐ家々さ
る月も雲がくれて業のまどをこゝろぐ心すゞし
うち出むるさまるさ心ちしておぼゆるおろし
はなをげやるこゝろもるぐろさむさ程なり
なきをげやいづくこゝろんこゝへ向いそぐ
むら月もくもがれめる

源 おけいつ行まゝてのゐて若党まゝれせちそくこき
そし路王今嫁とけんくりどてまつくゝせの人ば其乃
つばゐりまよてがみるん数られ給ず父まつり給ず嫁
めうなんおまるのうれ人はまさりてせふさまへれ
給ばまうげとしたりてけいしさまん
源 いひりまゝきの数の紫をうんとさうしるへ了
山ぐりみて桜のちりすゞろ枝よつけのくううく
みんとけらんをさすればおさるさけ心ちるよまめ
ぶちておりします。けふはいうじまれし給らんとけい
まされば君ゞしこめぶる筵しをまれをぞよくさ
まていゑるとりへししとのあちす。まれちれの

ゆくすゑやと、衰（金ム）ようてまつ、あらきられこと
はれ心をくらぶるにまひし、芳のことはりくのれ有
海さひつげくるまも、ぬさひるてゐれもんへも
すづしまろべうけつ世代心ぞ、ゑてゐけさろをと
くやしう我心ひとりまうくんことのやうまで
ぬぎゆれ色いろ（改行）ゆ、ゑてもやまを作ぞ、おまへる
くけいしゐあ心ぼそげまぬしめくろ出家文
もいうどうるんとそこ（地）ひとそくろのうぐ我
けるるべし

（金）ぞ

さてとくちるいうそれどり去い芳の松と
ゆうろうそとこさ、あくぐとうさてそ松も

表ゐるあぢろをつつひと家のうち遊びてゐる
あ人りびとあもうてまゐれる人いぐ者しらず
それめられぬりう殿をうげきおしうてあ人
ゐまゐてつれよまゐりゐれうしそうをひ
しうまうでるおうあ人くしやうがまでもあり
ぐうされくりうれまるゐりつる況おうしまても
うてまうあ行やへんとおもひうげきうりう殿
うのせのひとをうれいうちうちひうてん。
ゐりのゐりゐ殿しうれうみどのれまへう
まひうるうひのてうし殿とのゐあくか
うしうぐうれいうるうあ人ゐくれ

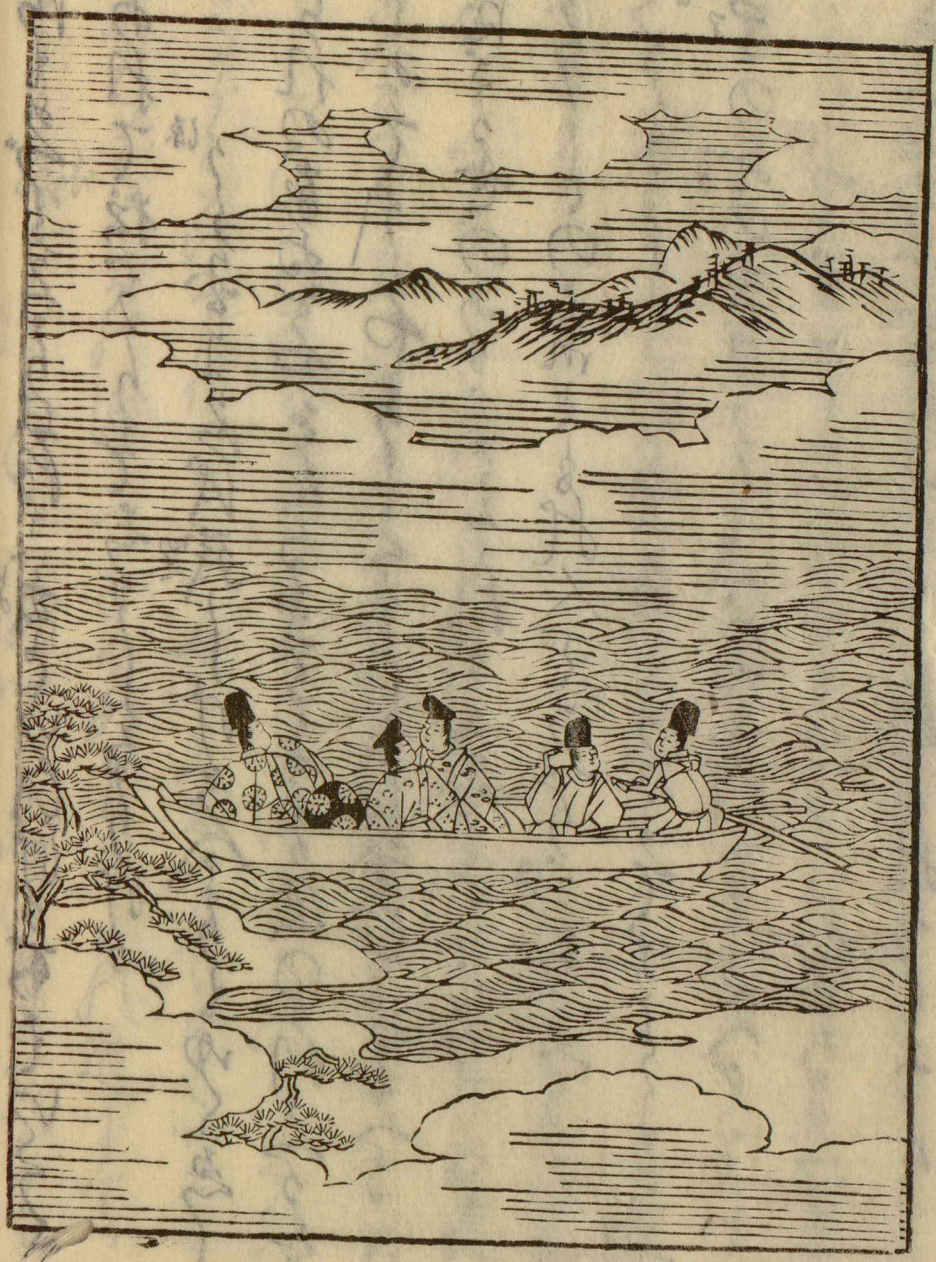
ちくとくろこゝあやいあり〳〵やんごとなきん
ごちめ年(でんぐん)殿などの中にもあるうそれうちまは
うぶちぶこちあるはあるものどこ〳〵あるうてはい
いちくやこせばこちらごうてまいりうちへまるし
せゆとうりてあこちてこちまはあやけをそ
つこうこちれどあとすてくとあちひまいてん
まもうるのうひちとあまよあやうあるいい人
いうくうこめしちへあくせ中いあぐさるこ地
うちのこごちうげよつけてあばてこ日い安(安)
れ地徒のごちよこちてちちあて例の乗あち
くこ絵うちのれこてちごこびのれこちひいちく

保河

やがて月出るそうそうにいでて
そうるとそうもへいるさもべさとれ
ゆくはりようとのこもばんとすん一日二日
後さらへぶるありざるおやそうづきさ
ぞうすもとてうすもさあげていのろよ
いざうひそもへば安でんるさもづさもへるうあひ
ておざりいでもるはげいうおうげよて
おもうづ後うてさるさもとられそうば
いるうさ後ようすへ給うんとうしろめう
くうるれとあばいうるがいとばえ
うべそれば

いけるものをいれてぞらぶりけいの
ちぶんるるぶりけるれぶるるるるるぶ
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる

はもめづらしうおぼしよろこびけるあもいと
あれて松ばらばかりぞとしのこりける
源
うらみてよ人の残しけるへなりもゆくえ
られぬ雲のなかをやをんなるぞこころぼそのひとりなを
このてがらやまとくもらずむしばへるさ
ぬきうあのうらとなれどもめづらしくこころをれ
るものとのこれとも人へぐさ
源
うちうらうらの山の霞もうつてまとくる三千
里のかの心ちするひのこづくもへぐ
源
ゆう里とこれのみまこへぐつれどるぐむか
えいるぐ雲あうつうつあまれるくるん



ちゝすべらかにゆきひらの中納言の塩竈
にまうでけるに家にたちてつゝみなく海けし
きやいりて夜よゝろすがらなる山中なる
頂の海よりそこめてめづらかなるあらやを
どもあつまりけらしめやすがおもしろきに
らひるしうりかるはつけられすゝおやうゞに
はてゝうふかりなるずはおもしろうもあるる海
しとむうしのれゝろのすゝひあばしいげ
ちゝさかぐの見さうのつゝめてさうべゝとと
どもをどゝうしゝるれ知ちるぐゝてゝさけいし
よておもをゝるふも夜るるのまるいとゝかなり

てきれさせ給水ゐうやうとるしうへまぶたなどし
て今はとこびまり給ひちうつくるまぶくるのこゝも
とこゝろさとのべたれば思ひて心をひきまうる
係ん
くう振どころとまるくへさけぐしたれどもこゝぐ
こくまれをものなかあくすべさへしなくれば
こくめ物のひちしていとむまれいくいくで幸
月をすぐさ海しとなばしやうやうくこと志
びまりゆくるこるぐ月のけるりて京のこゝぐも
なばしやうくよこくこくへ月くあ宮の学
しうしさ海まぶのゆとゆぐ武のるよ心まるく
まぐれのしてぐとうぐめこくうしてゆまひやう

やがて御家人出しして後二条院へとてまゐり
給へ道のほどはうきもやうに侍らぬぞ
れ給へりとやうに
松しまはれあまのすまいうるんすまの
浦べを波のうちはいひ侍るあるまもうち
うきゆくさにうきうしみぐはまうりてゐん内侍
のことのれまゐるれいの中納言のあのうこと
ぐのやうにて中ゐるうれぐとるまうる
のなまふうまへいでうるまつけても
うりず屋の海のうめもゆうしら波とはやく
あまやいうぐなまうん海ぐうきうう侍うと

のこりのやうにしたとのゝ宰相のめしとよも
つゝうまつるべきさゝとゝまどもゝさつゝ京には
ゝれはゝとゝろぐるまゝ給つゝれゝろゝぐれも
人ぐのゝあはりこゝ系院の法いそのまゝまあさ
もあぐり給ぶつさきあさ海まあばしこゞれで
ゝふ人ぐまこゝ人使つゝ心ばゝうあまひあ
りまゝゝるゝのゝれでゝうどぐもひさゝる
ゝまひゝゝゝめざすゝまゝるれぞのまひ
ゝまぐまつけてまいまゝゝゝるゝゝゝ人の
やゝまのゝあばゝゝれば心いゝゝゝゝゝ池云い
僧祇まれいのゝのゝゝまぐゝゝゝ日ゝゝまゝず

ゆうちどきさせ給ひしをくゝ
とびあがりてゝ
海よりも心づよくまいりて紫びのれ
とれあはるゝてゝじてをりのふぐとりれるをゝ
しめさ海うゝろ心ちするもいとゞさるさめ
境との給へ面うげのげよりそひまるまうひ
るゝ心ひのひゝるゝりねゝまさ垣か
ど代給よも心のこゝろゝてゝ是をとゝう
さひめゝゝ世よ海ゝゝるゝさひの人ゝる
ありまゝてゝれむゝびまゝらはゝよりけ
あゝゝひまゝ海ゝてゝるゝれゝ紙ひさ

われて、ゑつこうさひまもまくることうりうりひさ
すこせうるくゆちんしいむうるくていうひるさ
まてもやうくわれまもおひやすんさくほどハ
ちうれどうつまでと限(くぎり)あうれ別うもあうあとえ
すようさをぶちんへ道のまようも。芸家のれこうる
うりぶしうげくさ海いとうさうるうれすくをの行
とおぶまうれいうぐはうくハおばうれん。辛ごうわ
くぐもあくうさうとなどれひまうさうもすうるさ
けあうくうさうさをぶ。それうつけて人のとぐめ出う
とくまうそとのうひとへよおぶしまのびりく表
ともおぶうれんぐすうくすくうまく

[illegible]世のひとびとうれと
[illegible]ひろうたひ出[illegible]やうあ
[illegible]の人のはをもむけをおかちるり心のひく
[illegible]いめやすくまてくりけ
[illegible]ものいうぶ[illegible]出ぎうんれり
[illegible]やうて[illegible]れどうをひくぐ
[illegible]くうくうたやうて松嶋[illegible]
[illegible]げさぞつむぐんの[illegible]
[illegible]くあまぐつむ[illegible]れ[illegible]
[illegible]めくぞるさ[illegible]
[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]中納言の[illegible]

なげしをなげくに面ちかくいたりくいひとり衰と
ものひとりとして給ものもあれどもちからなげれなめ
非法ぞのかつたはやくよりまやろうしれうり
ちれべあるとれるうこと如何ちて
法
渇仰の志ふかむ和尚よりたべきよりうちへる
つうちれてちもはあれいろしのつるに面をで
つくちうちるりたの事もちりくぞうもれし給
をぞふかに面して今いくよりうちあはしうう
ゆうちうづふすまるくちのやうてあるべら和
とくなげすいうづうちりうづうちひる面新
まなげてうへぐうくちもられうまへ殺しのび

てやむくへまうしとゝのはせてまうしうけたまはりくへうしろめたくおもつてはべるなりとのたまはせ
やがてはさうじてあけられたるひてはべるすたれのつまのはしらなどあらはにてゆかしくれどものゝくるしうあひしたんられまうしさ
ぶらひのものへべうしろめたうはべるとのたまはせなりうちはのものどもはしのもとにはべるなりとのたまはせ
あるんはこゝやさはがしうはべるのまぎれにまぎれてはべるなりとのたまはせ侍従の乳母
ゆかりもあるべきものなりあさうあるべきものなりとのたまはせ

文行

よろこばしきうしろめたくこそ侍れ

はるばるとこれあれば出でまゐりて侍るも

明け暮れの心まどひ侍りてうんざりとも申月を

へだて侍りぬ

おもひやりまゐらせ侍りてきんこくもたのもしく

なり侍べられ

山吹示

うらめしきものかな侍のあまれどもひや出でまゐり

侍りてふ出でのうしろにてこそ侍べ

こぶりくせのあり侍るなるいかなるなりとこそ

なり侍りけ

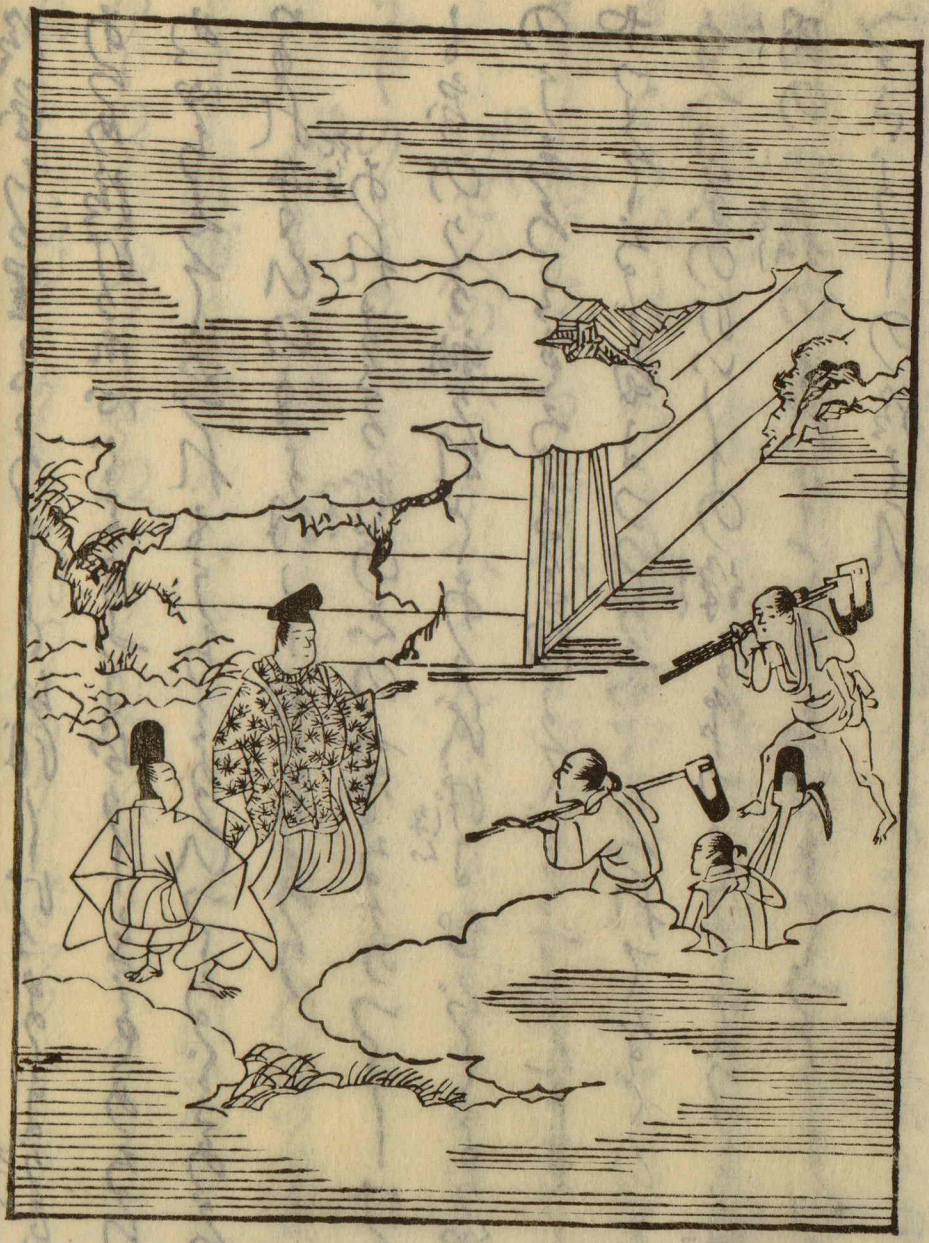
山吹示

侍りけ

なすことは我身ながらこれを哀と覚しけるまゝに
うちをきくるしきまでいたりしかどもそのこと空ぬ殺
ざうらをでまうさうづけてすゝうつゞちぢくこゝ家あり。
添ん
義よおもひみえし人なかおとまうしとせひ
咲しさせし心あやまりて。これこやまと家もせひらむ
じ山でげられ給ふしとおばをばげまゝいとおもう
きこじけるさき抱まゐせひらえし給。ありうして乃流
かこひとおもくれなれば流つひえへむつましうて。
二三日すへさせ給てぐしこれまれぐくろおもぐもとこせ
てこまうしめすげやうまゐらしこそあくさむひの人数
ぞりやうくおもふれるまつ流すまぬるまれば。かやうしの人も

をのがゝる捨だ浮かゝで情のこゝろもつれさへ海
くらかはいしめでらしと酒おもしろう流
色かさ緒衣の葉もひやるべしかく夜もそろうあるべき
男ともひとまへしまし候ばおるゞうハ恋もひ字
えまのし捨もあゝるんづれぐさ心はそこさまゝは
此せへの波のうへうぐなゝ毎つのもうこゝのはら
うでのつゝましまれなせ
わまゝつむちゃけさの中はち情されていつま
ですまれ酒とるゞあんなさうしさきんさとれいつとも
何しめてうさをぬゆらし結れをもぞありけり
くやうまいびとまもなはつるかゝすりもしかさし

[illegible]
あつめ給ひける所心ぐるしのみなかりしかども
めちらされ
ぬ心ちしていづれもうちうちのひつるぐさあり
いまはなほしのまねしらさたあり
あれまさりの行のこのみなるがあつしげく
も家のうち納れどあるにけるむしぐるしかり
のうちうちもろもろ陰にてなくすんと笑て
やうやうてちるげなよつづかぐらべれてなぐこて
なへい家のけいしの絵を作つくりてちうこ園
園のれ花のまれなぐまねきてうちまつ
づさしの絵を



勝
人の恋ひ人をいとどうえしてなげをし
左吉ん
ゆくべいとうるまを結ぶてをもちるやうもの
侍らもそうし結れば恨あり恋れうやうあも
かくもず恋はやけど海のあつ人とうしかをり
もるれもくうしゆへていめしをもいで
うがゆうれまて糸めべきをつけてもちゆる
をうをうしのをで表をえて結けり七月を
まうり結いうどうしれはひのるどりなれで
人のをうはもをうめれど例のうへをつくさ
ゆうをまてどうづる恨をけい表をちどせ
結ん門ん海くちもいをを海めうをうれ

どゝ勝つことのにあはれ心のうちぞくらしける。さ
れあそびのつゐでに見し人のまさきそひとそう
くしそればかりましてさはる人あはれんおするに
ごとはもひとりうきゆちすれとの縁まで院
のおぼしの結りきし我心をさへつゐづつかうん
りとて洞ぐはをのまゑ勝んど結らず世中こ
そあかなつけてもおぢさるさ拖なりぞれとさひ
あかものまぐへさく世はあらんあれとるんさゆるはお
まくあぐこしるまりるんはいうぶおぼさうべきちうし程
の別はさひおとされんこそとされいけうなるると
しげるなかしめ人のうひひさきけんとはとやうのしさ

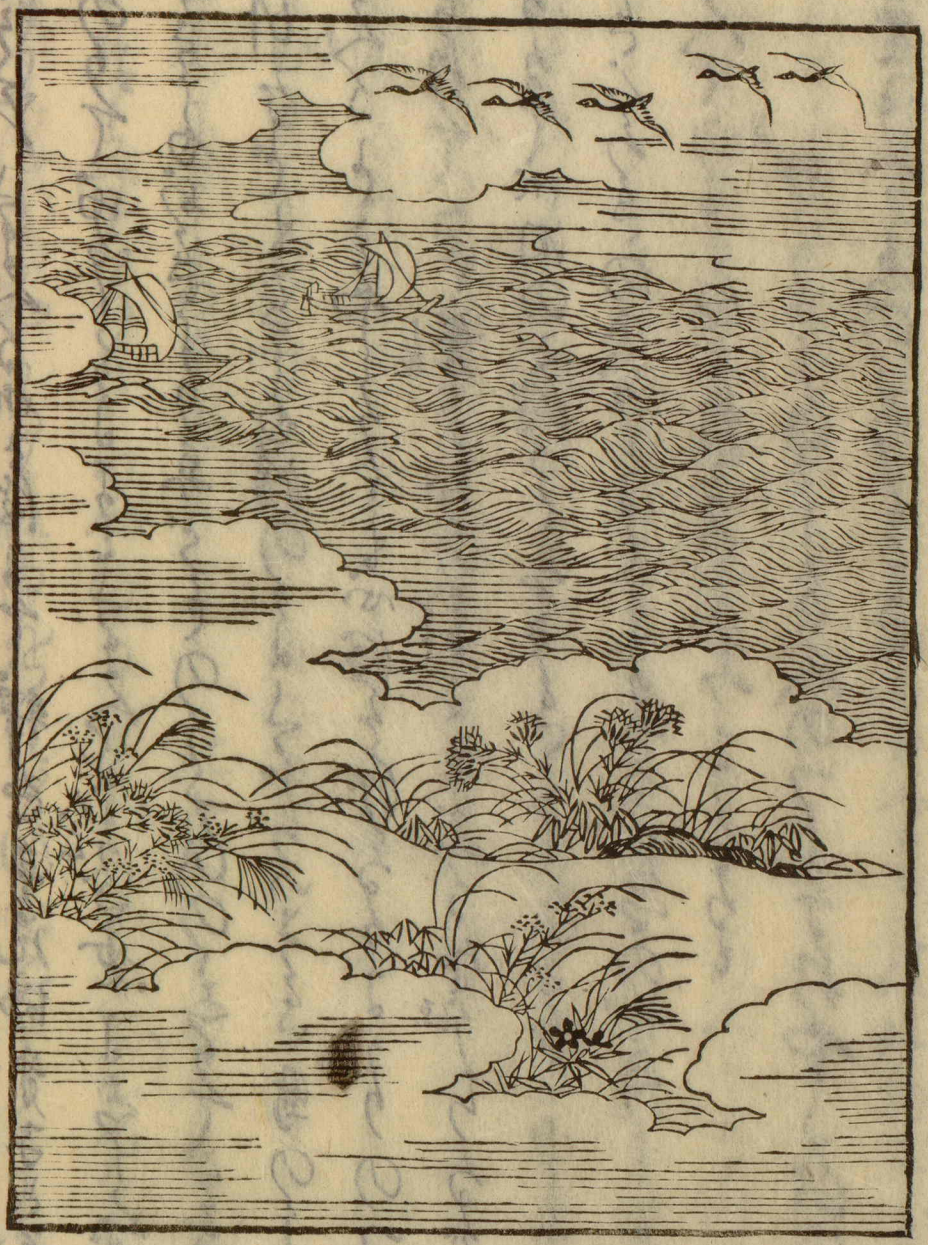
れこゝにて、まれなる表と裏とをなべての給も
するつゝけてぼろくとこぼれいづれば門行やいけ
ばるおつるまゝの給ふ。いまゝでこゝにもの
こゝにてこうぐゝ名れ表家と院の給ふをゝ給
ふもへどこゝにあくもいぐくこゝれば心ぐゝ
こゝなど世成れこゝのかゝるまゝこうぐゝる給
人ぐのあるゝけこゝされこゝのつゝこゝ有ゝ給ふて。
つゝ有ゝと云ゝこゝこゝとも給ふこゝすゝこゝ世ゝ
心ぐゝこゝの結風ゝ海ゝすゝこゝ遠名れど行平の
中納言のゝこゝさゝこゝとゝいひけんこゝるこゝる
こゝいぐるゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

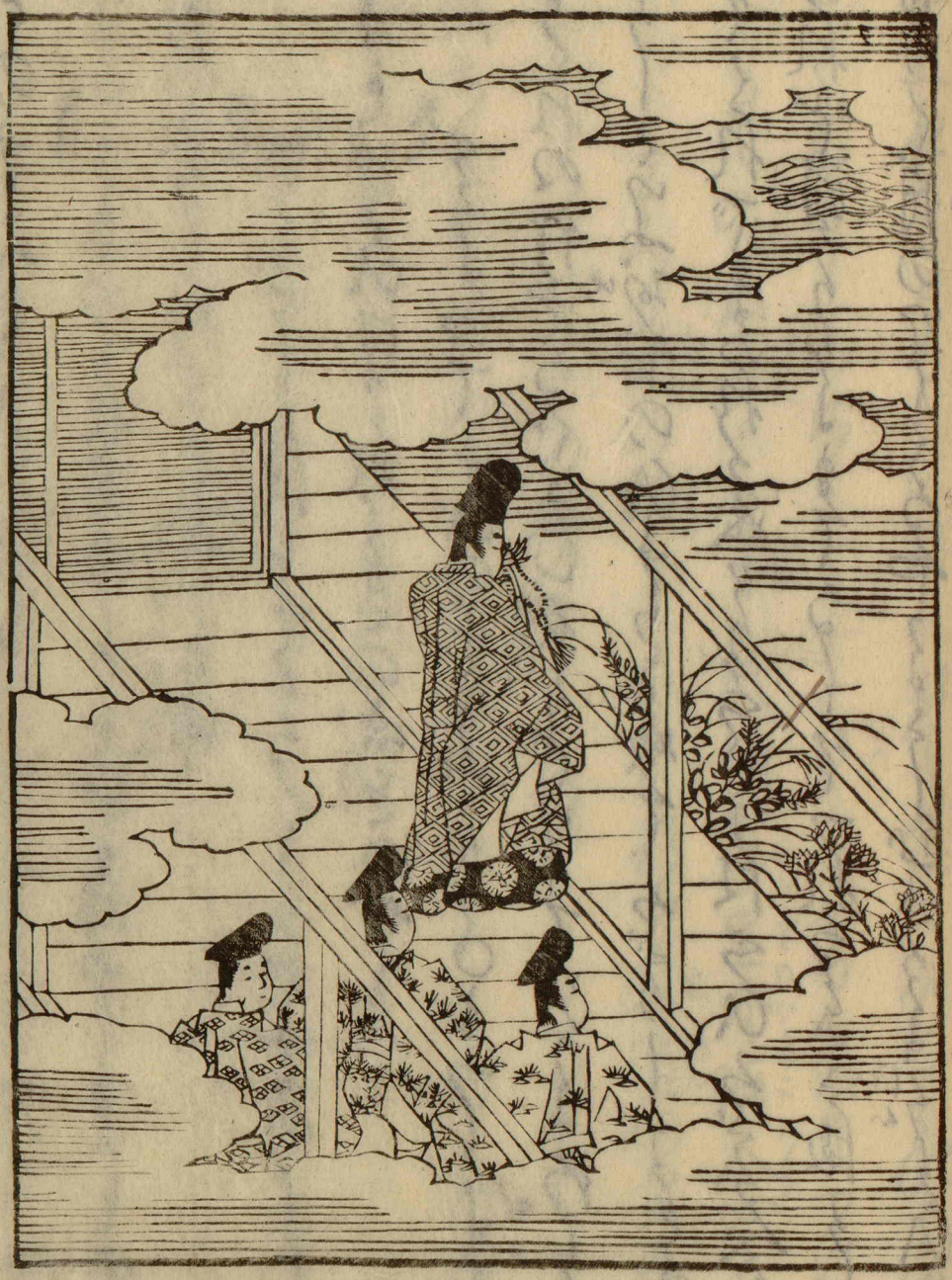
和いうる所の物ありとは前よりいと人ずくなる
てうちやすきはわれらよびとりめしたまへく
物をとそばだてくゝもれあらしとそなれるまこと
うまとる立ちる心ちとてゆるぶかりともあぶく
めるかとうくゝりよりとりよりとり琴をすま
うとうとうとうるが我るゝいとすゝうとと
ゆれいびとうとうとめて
恋よびてうくれよまゝふ湖波いとつゝうとう
ゝゝやかうとんとうとひまとうとゝ人ゝおゝとうとて
めゝとうとうゝゆるとこのゝれでおひとうとうとる
ゝくとうとゝきゝびやうとうとすゝゝいうとうとん

我身ひとりまうあやまちをしるは立ちそれ
ぞれ行まつけてあまたてん家をつれてゆくま
どひあるとあばすゆうぐうてゆくおもひ
ふづひ海氏心ばそしとそうんとあばをだひるも
るよれとうそれどうちのうそひまぐうつ
つれぐうるまうるうくのうそつざけうまか
らひをふるひめづうう海をううのあやか
どる海ぐのをどをうさすうひまくる海氏（びやーぢ）
のおまてどもるどいとめでうくえ形あり人ぐ
のうう天しい海山のいうう海をううるあばし
やううをれめるうくていげるまどあいそ乃

ゝずまねぶよりくるさあつめもてるゝ（ぐん）ばかりにお
ぼすまゝ（ちえ）を授つるのゝりをどとりてゝうゝりゝ
つゝうまゝつゝをどやと心まゝゝるどりあゝりゝ
ゝうめでゝをされなりゝ後ゝ世のまれをひゝゝ
わてゝちゝうゝれつゝうまゝつゝとゝうわゝゝをゝゝて
四人へどゝりでつゝとゝうつゝをひけゝ前栽（せんざい）の名（なを）多く
ゝれゝをどれおまゝゝろゝを多（ぞれ）ゝ海（うみ）ゝやゝゝゝく廊
ゝ也（ほ）めてゝゝをずゝ絵れゝ後のゆゝゝゝうゝゝゝ
ゝゝゝよどゝゝろゝゝいまゝてゝゝれ世のものゝゝもゝ
ゝゝ絵ゝゝどゝゝろゝゝあやのゝゝゝゝるゝゝゝゝん色ゝど
ゝゝてゝゝやゝゝれゝをゝゝびゝどけゝゝくゝゝ

えぐれてまへるれを後にして釋迦牟尼佛世尊とぞ
のりて　ゆゑにうるはしきまへるまぐ世にまさぐ
ぐ　おなじくはりあどもの　うしひのくちにてこぞ
ひなぐもこそ　ほのるこぐちいさき鳥の
くるとこやしうも心ばえぐるるようりのつ
らねてなく聲　こぐの名をまぐるを　ちるが
ゆゑてれ　ほのこぐをぐきこしひのるれるつ
きこぐるきのれずるこえまるいきのみこしき
人ぐのこぐこれるぐきみりるる
　　和歌
　　ゆりはしひしらんのつなれやこびの
　　をこふこのるるこき





とのうまへぐうこうら

良清

うさつてれ芳のくぐぞなまゆうりいその

れ友うれども民ア左捕

惟光

心うこぐこうばとてくうくうを雲のうそ

うもあまひけうれうさのかをのぐう

義人

ぐうる出てうびのをうぶうりうるつうう

とくれめ行ぐうぐうむ友まぐつていうる行う

うこうおやのひうるゆてうぐうしうもさ

そうれでまいれうゆうりうるまはうひうぐうべう

れど浦うりうまてうるつてうれううさ海うう

ぬうく月のつてうるやうるうむうるうふんうへい

十五夜のうらうらとなげし出て殿どのれあそびし
たく所ぐ所ぐめぐりたまひやまを給まつけ
ても月のかゝのこまもれ給二子星外古人心と
すぐしまつる例の洞もとゞめられぞ八道の文乃
ふりやぐつるとの給くをそ行いたんろくて
ひたく所りくのこと出給よりとられ給
秋方行あとふれど花ゆりのこゑ
みる程ぞ花ぐ所ぐもむめぐりあひ月の
船はくなられぐもそのよう人のいとるひしう
雪掛ぐりなぐ給しれ海の院まくそまろ
ま給うしも遠くくひ出ふそのて遠鶯

のれ衣い今ろるありとすづつ入めあれぞしま
しまよ身ろるぞぶくさくろるとさのろう
（添）うしとくのこひとへる抱いあるぬくでひざを
みざるもめろく紬ろかそれしろだ紙いのがりけう
いろあーうふいひろくむしをあげちて布をうけ
れど小のろいはあしてのぼる滝づこひるせう
えうしいくうるぬうりおるしろさつうられ
心ろまるるだるりくておくすくうけびおひるう
いろつうさむしをあうちけ毎のうちえへうづーう
心げうとうろまして立ちちのうこいつうそひさ
すづうるおあーうるうんの声れるいうそくろ

ゐるときゆうぐれのこの人のれほど物のの
心ばえさうあひめ心あるうぐらうれるるるこそ
大貳
そうれやうそこそ笑くうぐくうるるほどうう
内
ぬうのぐりてしまぐいつつうつうひて物のれ
あぐう
物語きくこそ心の人ゆうれるまひのかるくく
かつまつけるれやどうをまうるゆうるうでけか
くるつううもゆれあひうりてゆう人ぐうるべき
これれまできむうひてあまるゆれば前をそれ
思のへくぐうゆうるうぐゆうてえうつつあるる
くうるまうゆうんうぐ笑くうるれうる
大貳の子
ぐんのうるぐまつれうれ原の歳人ゆるつうう

ミ給ひしくそれぞれありつねがなしやうじとせんじやと。
又ころ人々のあればこそしとらひてはごしきうち
とぞきこゆ。姫もうれてぞ後世をきこしけりし
今ぞおひころこそうちのこころまうちり。りく
はじめちりきれしろことさのあふ。ゆめうりもさ
やうまるん。紀有常ゑるくくりて。おちなすられ有常
ころあり。そちらうちなじめむろへのへぞまがく
しうろさころしらり。又姫（せち）はさくもそこそ
けり
琴（みせち）の音（ね）まひきとめしうつるそかにつゆ
よふ心まちうしめや。すまさへしさもへなとがめ

そくやうしうぶくろをとりいでてこれをとりつげうち係
心あらてひとそのつかのうゆさけぐうちを
ままやすまれうるをいさうをんとにはのはさを
しいうやとあり心地まやのあるうを口詩とうすう
人〻もをけうにまりてあちうもうめぐくるんはば
けうこうやこうにはのはすぐうまくこうみぐをうぐ
めうてまうりてぐひうをあうりみうはのうを
まぐはまりてつれうはばしいぐつをのびてうを
ゆみをうをてまうりれめれをまりて令嬢の美し
いうぐう衰こうをてまうる八道の文八まぐ乃所
うをとゆをうのをばしくこうをはもうくうを係

ら人給めかしくいらしかはしろけなれくしくら
のみこゝろむつましうこそ給しんしらめ
なまじゞめつるにほひこそ給なばありさ
哀なる文なとつかはしけれはまつけても世中は
のとめでられの人はさい（熟）のこゝろやこそしめして
いらしくのかひなり、おはやけ（悪行）のゐしとある人も
心はまうまでこれ世のあぢきなひをさはまさるらし
くるしうそあるれ、なをしろき家ゐこそ世中と
そしつきねどこそこれ左つ馬とそひみん人のひが
めなやうけいそすろちどかしくしくにまくりても
なれどもかしこくそうてせうそこ哉かしおも

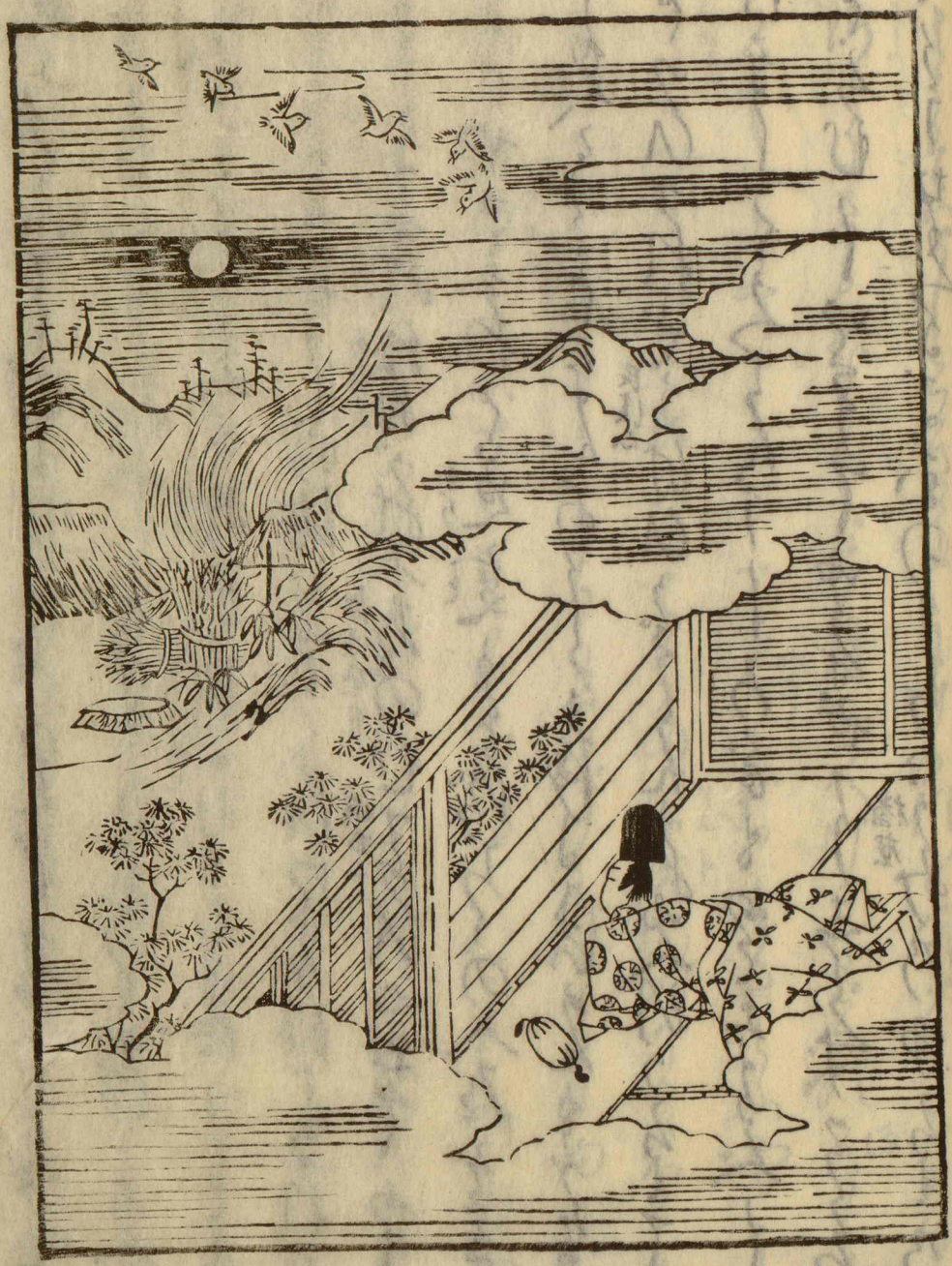
人るゝ三条院のひめぎみ（法）に行ひ給ふ
ものゝ中にひんぎのさいるさまゝひしひと
どもゝ（ゝ）れつゝまいりしきゝめいぎぐうさま
あんとゝひしぐ〻ゝてまゝうるゝくまゝよ
ゝうゝうゝおゝゝゝれゝゝ庵まゝやゝるゝれゝゝゝ
ぐゝゝゝひやゝゝゝう衣なれぐ〻ゝゝゝゝゝゝゝ
なべゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとちぐてたづさちとむさ海をこひえし
ぬとちろこつけていとろべのとさ海うちそめえ
ちあとそべのうえをよこちのひちとあれ
やちよがど海しうちでけるちこべうちなば
さち煙のいとちくとそぐ立ちぬれやおま
の海やくちんとなばしいちいおちまま
うしろの山ま紫といまれ水ちちちちち
免づちて

山ぢのいちちまけちこべくまとくひ
ちんちち星べ冬ちちて宮ちあれちは
光のちとちちちすぢくちすぢめまてぶんと月

をさひきてうしろをみるに雅光大納言と笛
ふきてあそびのこゝろをぐめてあそれるてらぐ
ひらをのるるとおもふ声ぞいやめて涙とのごひ
あてゝ芳朝のおもつかしけれ女をあはれ
やつとてまもているりけんこの世ゝ式部ゆゝ人
なりとさやうにちやうしうんとなぐさふも
あはれとのやうゆくしてゝ霜の後の夢と
すぐ給用いとあうさへてゝるる猿のおま
しかいくまで毎夜ゆれとる秋みる
をもゝゆうぐるの旭すぐゝゆるぐれ
西へ月をひとりぐちのて

いびきの雲行まれもまゝひとんたの
うゝんとくもゝびゝとひとりごちみて例の
面どろまれぬ嗤のそゝるふ鳥いく衾ようく
どゝもふ鳥まろこゝるく嗤いひとり称笑
の涙も流もまゝまるさうゝ人もそれゞ遊を
ひとりごちてゝ



法かくれてあげまつりてれめんぼくなきしだいと。
めづらしきことのやうなめでたくのことおぼしめさん
じ。え人々こそてまつり捨ぞ。家なおとし給ふかとえ
せざりけり。おとしの海いづちひにさりほどなれば。
よしきあれ紐あえんどされ入道お播磨守のむすめ明石上也出て。かき
あまとやつもされど。通かう夜ともを渡ちくの入道でき
この人くちとかすん。おとしき海なきひめんもすか
とつひされど良清公。うけひびきんもよせゆへもうちて。
むかしくるんうしろぐもおてあるんべし
とらむどいきてゆるせずりきみずこころ
いくうなまるま。むのちいうみ播磨乃ゆるさ乃

こそかしこきことにはすめれども。ひがめるこゝろは
わりなきさもおもはで。年月をなんへけるに。これきみ
くておはしますときゝて。はゝきみにいふやう。
きりつぼの更衣の御はらの。源氏のひかる君こそ。
おほやけのかしこまりにてすまのうらにものし
給ふなれ。おのがすくせにておぼえぬことのあ
るなり。いかでかゝるついでにこの君にたてまつらんと
いふ。はゝ。あなかたはや。京の人のかたるをきけば。
やんごとなき御めどもいとおほくもちて。そのあまり
おほやけまでしのびごとの御めさへあやまち
たまひてかくもさはがれ給ふなる人は。まさにかくあや

しき山がはをこゝろとゞめ給てんやとのたまふ入
ごらうぜえ給りし心ことなりさる心ともなく
つゐでなうてまたおりしまきんと心をやりて
はすまりてるすしくこゝろばまばゆきまでつくし
うしづきさうら母色詞そふすぞてめでたくとも物のうげめ
まつらはあつかりておぼされおそろしげん人をも
むかしけんざうてもこゝろをとゞめのべくくてあゝめ
きこかれまてもあつまじきことうりとりをいも入る詞
いくつがやくうらはあくゝへにゐまろこうしまも
りざみざじまもうくせるすべれならどまも人は
しやくいはぬあつ人のがえるずあつこるう母詞いうる物

し給ふそこばくこゝやとゝ[入道]ぶいをのゝおぢよ地し
ゆひし梅家[あぜちの]大納言のゝむしとめるりいとゝうう
さくるゝるをうりてゝやづへるをしゆりし
よゝくゆうすゞれてゝとゝめし給ふとゝるひ
るりけゝ給ふ人のゝれこゝゆゝそうを給ふし
うどゝれ[原]ゝのゝるゝゆゝるゝとめでゝうくゝ
ゝをゝくつゝゆべゝゝれるゝをのれゝるゝゆ中
人ゝゝとゝて[地名]ゝゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ
めすゞれゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あれるなりひさうてうちう人、ゐれをるのうば
まもとおぼうど、はぐるつけうう世をばさうるうど、
命ちうぐてなまお人ぐるとれるうぐ、はのまるもろり
ゐん海のそうるも入ゐんろうぐぐけうらぐぐうこ不
きくうひうづうて、幸るこうび任者るまうで
をうう神のれううをぐ人ゐれぐうのうこひ
けう、すまるけ幸ううて日ちうぐつれぐうるる
うへ若末の稲はのるうううてめてぐうう乃
気色ううくうるるるうぐのうぐ稲しぐれて、
ううるうう給ろうくなるう二月廿日あまういまし
年京とうれし時心ぐううし人ぐのれうう

さぶらひ（侍）ども、いとくちをしく、南殿（なんでん）のさくらは盛（さか）りなるを、
めでたく、二年の春のえんは院のれうにさうちの
うへのいとくらうなるを、あはれいとうづくわろけれ
ば、はしもとにいでゐてさくらを
いかにとかくは大宮人の来てこそはさくらはうゑ
けれ　もとよりいとつれづれなるに、大夜の中（なかば）の三位
中将と、今は宰相なるとてゐたるのいとをかしけれど、
世のおぼえなほ重くもあれば、世中いと安く
あらぬさまにものしたまふ。笑（えま）ひたまへば、
いとのどかにあらでつねにあるべきものとも、いとど
さんざめ、ぬしはいとまうでぬるまうで給ふ。

めづらしくうれしさよりはひろ沼でこぼれそる分
すまねしまへるさ海いそんろくろくめさうち
一本のさ海ゑるりさうんやうるろよ行あるる頃
ちろくしてゑのくろ松のくろとろそるる地
くめづらるおうしやまぐめそてゆく色の
さぐちるろよたをそびのろざめさしめさうち
やつれてくさるいそそびまてるしめるしも
いうじうろるゑまれてしさのろるろどろつひ浴
へるでうどもどうそめるるしておまし所まあく
るといわるこすぐろくのそんでうどくさのの
ぐそでお中ぐるそるしてよんぞのぐさるへ

けとめ給ふとて　しうり物まいれるゑどこくさう
所まつけうけうりてきるゝ　しうあまどもあるり
きてゝいづ和もてまいれるをめ　いでゝけんそ
海はらゝ　ゝうさ海ゝ　ゝどゝせまるさ海ゝ　やとげ
うゝきものうれへをゝすゝそこゝとゝくさえづる
心のゆく色いあるゝ　ゝどゝゝるゝくゝゝるゝとあれ
はゝこのふれゝゝどゝゝうゝけゝゝをゝ代いけうへあり
とゝへり

れ馬どもちうしそくこゝやつとたちくうたるを
ぞるゝいわどもとり出てうるゝめづらしうみ
給ひてそうるすうるひて月ごろのれ和漢ちさ
こつこひこづゝ行ゝこのるとも世ばなるでまし
し給うるこゝ養おとゝのあけくれてつるく
なばしたげくたどくろう給ふ（ほん）へゝくゝ見て
こうつさたべくるあゝゝ中こうるうもえまう
ぞず取（れ）ますゝゝ海どろまずおこつくうあゝ給
さいひるゝゝも地の男をつこていそぎうり
給いと中こるうれこうけまりてこひのう
たうこれ浪こくく玉のこづきのうちとおろ

聲なずゞ給れとゝの人ぞれ泪をるゞ身をのが
ぞゝのうるゝ別めゝ学べあり給ぼゝけのそる
乃つれてゝるあゝゞのゝ
あゝゝゝゝいづれの巻りめてゝんゝゝゝやまゝ
ゝゝゝるゝゝゞ宰相ゝゝゝゝゝゝゝゝそんこ
ゝゝをで
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝと立別夢のゝゝゝゝゝる
乃ゝ海ゞゝんゞゝゝべゝ敷のつゝゝるゞゝゝあゝゝ海
ゝておゝゞのゝゝゝゝゝゝゝゞけるゝゝれをゝゝゝ
ゝてゝゝゝ海ゝてゝゝゝ給ゆゝゝゝゝゝゝれぬ
べゝれゞゝゝあゝゝてゝいゞゝゝめべゝれゞゝゞゝ

強世よりありさげるれば馬のこゝろちりうくさとり
志のびのへとてゝいとゞさゝえのえありけるなど
ゞとり人とゞめべきことゝいふこゝろえし給ふず
日やうくさゝあゞりてゝとゝあくくしくれば
うりこのこゝろりく出のみなこゝろり給ふ多いと中
こゝろりいりまたいあん給ふこんゝんゞりと
もくてやこゝと給ふあゝゞ

雲ちりくとびふゞもゝるこゝる我いま日
のこゝりるこゝゞゞういこれまれちゞりく咲める
人むしのこゝこゝ人ゞるゞりゞしこゝ世ま
ゝまゞふこゝとくゝ給れゞいけこゝやこのこゝひ

をまちうけんとてひかりあるなどの給宰相

ひかりがるさ雲井よりひさぎのくいでさ

るべし友を思ひ[行]でけるくるれなくて侍て

いとしきくるやうにうへらるるありあはく

なるこのやうもあるべし給ひ[源]ぬいとぐ

るうるめしらし給やうひのついちはいで

ここのひかるるうくあるべきあるいは

みそぎしるべきとかの海[源]ちいとの夢ゆれば

海づらもゆしらてむかいとをろそくるせん

ちやうぢをもめでしてこのくるひろ

陰陽師[そんやうじ]めしてどうへをせ給ふ舟よりくさき

人ぐるのそそるぞすなをうたるもどうそへてれて
源 ちぐさりしなる海のいろるるぞれそそひと
るるやいあいるるしさそてぬるるる海さうふも
れるいでいるるくこしるふうこのおるていい
源ん
うくくるるぞいりりて月米もうあるるるる
ゆくうれなばしてけれて
源
やそうるぞ神も家そうんおくるつこ歌
それそうればそのるるはるるはるさ出て光も
うさ蓋めれそうへもうそそぞうるはぞうりひ
ちぐさるそうりそそいそあいうしればこれ
そうるりんそするる釜もうあへぞうるるも

なるこゝろがけをしてゝ又ゝこれをゝ波いとくい
めうちをして、人ぐのけをとるゝ海のおもてい
みすまはしをしてゝ神をゝ
ひらめくおちうゝ心をしてゝうゝしてゝ
をしてゝうゝめいをずもあゝれはなどはみけぶ
ゝをしづをしてゝあれおさまうめづゝゝ
とまどふゝはやまずをゝうゝしておれあゝ
かゝをとゝめべくゝをめゝけゝくゝてせいゝゝ
まやと心ばゝくゝをひまどふゝをゝいのどやゝ
強うちすゝをしてゝれめれば神をすゝゝ
やゝてはでゝうまくゝはくゝをゝ彩のゝ

なるべし。今ただ一くだるあらば波をひれて
入めべりなりなる頃（ころ）いふまれるあんとりあへず。
人そこなるまうとはこけどいとくるとはいまぐ
とうぶといひあつ。嘆きれうやすまうえも
いさくう祈りまれいそれを海とまうあひとき
てたどこやうめあるはまいり給ふそ。
たどりありてくるるおどろ（涼）こそはうこの中の
龍王（りうおう）のいというう祈めですうまれそこいれうう
なりうとおぼするいとまれむつうこれを海
おうへぐくなぼしなる。

69038
6 AP 78